

日本古写経本『続古今訳経図紀』の発見とその意義 ——『首楞嚴経』に関わる記述に着目して——

林 敏

1. はじめに

紀元 705 年に訳出されたと伝えられている『首楞嚴経』の起源はインドに求められないのではないかという疑念は払拭しきれないでいる。また、興味深いことに、『首楞嚴経』の翻訳者と漢訳の年代について、唐代の智昇は同じ年に撰述した二つの経録——『開元釈教録』（以下『開元録』）と『続古今訳経図紀』（以下『続図紀』）とにおいて、それぞれ異なる見解を示している。この相矛盾する記述はいかなる理由によるものなのかは長い間謎のままであったが、近年、漢訳仏典の日本古写経本の調査と研究が急速な進展を遂げたため、大正蔵をはじめとする仏典の現行本だけでなく、より古い形態を留めた古写経系本も目にすることが可能となってきた。そこで、筆者は日本古写経本『続図紀』に着目し、そのうち特に『首楞嚴経』に関わる記述内容を従来の現行本と比較してみた。本稿では、その比較研究に基づいて、『開元録』と『続図紀』はいずれも同一の著者によって撰述されたにも拘わらず、『首楞嚴経』の漢訳当時の状況をめぐって互いに矛盾するような見解が示されているという謎の真相に迫りたい。

2. 問題の所在

『首楞嚴経』の中国成立説は唐代（727-780 年間）にまで遡り、その根拠は様々にあげられるが、大まかには以下の二つにまとめることができよう。第一に、同経典において明確に打ち出されることとなった、十二類衆生、七大、七趣などの説がインドの大乗思想というよりは中国的特徴を色濃く示していること、第二に、唐代成立の経録は本経典の翻訳者や年代などに関して相矛盾するような記述を残していることである。例えば、智昇は 730 年に撰述した『開元録』の中で、

沙門釋懷迪，循州人也。住本州羅浮山南樓寺，其山乃仙聖遊居之處。迪久習經論，多所

(8) 日本古写経本『続古今訳経図紀』の発見とその意義（林）

該博，九流七略，粗亦討尋。但以居近海隅，數有梵僧遊止，迪就學書語，復皆通悉。往者三藏菩提流志譯寶積經，遠召迪來，以充證義，所為事畢，還歸故鄉。後因遊廣府，遇一梵僧（未得其名），齋梵經一夾，請共譯之，勒成十卷，即大佛頂萬行首楞嚴經是也。迪筆受經旨，兼緝綴文理，其梵僧傳經事畢，莫知所之。有因南使，流經至此。（T55, 371c24-372a6）

と記している一方で、彼が同じ年に完成させた『続図紀』では以下のようなのである。

沙門般刺蜜帝，唐云極量，中印度人也。懷道觀方，隨緣濟度，展轉遊化，達我支那（印度國俗呼廣府為支那名帝京為摩訶支那）。乃於廣州制旨道場居止，衆知博達，祈請亦多，利物為心，敷斯祕蹟。以神龍元年龍集乙巳五月己卯朔二十三日辛丑，遂於灌頂部中，誦出一品，名大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經一部（十卷）。烏菴國沙門彌迦釋迦（釋迦稍訛正云鑠佉此曰雲峰）譯語。菩薩戒弟子前正諫大夫同中書門下平章事清河房融筆受。循州羅浮山南樓寺沙門懷迪證譯。其僧傳經事畢，汎舶西歸。有因南使，流通於此。（T55, 371c24-372a6）

両者の間の最も大きな相違は十巻本『首楞嚴經』を翻訳した者とその年代である。一方、『開元録』では、『首楞嚴經』は、懷迪という人物が菩提流志による『宝積經』（706-713年）の翻訳に協力した後、帰郷の途中の広州で出会った梵僧と共に漢訳したものであるとされる。『宝積經』の漢訳は713年に完成したことが確実であるため、『首楞嚴經』の翻訳はそれ以前に遡ることができないだろう。他方、『続図紀』では、『首楞嚴經』は般刺蜜帝という中インド出身の訳経僧が中心となり、弥迦釈迦が訳語、房融が筆受、懷迪が証訳として、唐の神龍元年（705年）の旧暦五月二十三日から翻訳作業を展開させたものであるとされている。

同一の著者が同じ時期に著した二つの経録においてそれぞれ相違する記述がされているという現象は一体どう理解すればよいのか。この点について学僧や研究者の意見は分かれた。例えば、長水子璿の『楞嚴義疏注経』では、『首楞嚴經』には二本の漢訳本が存在したと主張されており、近代の学者である望月信亨も二本存在したと主張している。漢訳二本説に対立するものとして漢訳一本説がある。例えば、錢謙益がその『楞嚴蒙鈔』では子璿の理解を批判し、漢訳は一本だけであったことを主張している。また、『貞元録』（800年）では、唐代の訳経三蔵として「般刺蜜帝」と「懷迪」に関して別々の項目を立て、それぞれに「一部一十巻」と記されていることを根拠として、鎌田茂雄は、「般刺蜜帝」と「懷迪」はそれぞれに『首楞嚴經』を翻訳しただろうと推定している。

しかし、漢訳二本説と一本説のいずれも、にわかに納得し難いところがあるので、同経典がインド撰述であることの信憑性に更に暗い影を落としている。近年、

敦煌写本によって『楞嚴経』の研究が進められ、上述の問題を解決しようと試みられてはいるが、資料的限界もあり大きな進展を見せてはいない。

3. 日本古写経本『続古今訳経図紀』の発見とその意義

前節で述べてきたように、『首楞嚴経』の中国成立説は古くから存在している。その証拠として、思想内容以外に、本経典の翻訳者や年代などに関して唐代の経録が互いに矛盾することも挙げられる。その中で、特に『首楞嚴経』の漢訳の信憑性に影を落としているのは、智昇が730年に撰述した『開元録』と『続図紀』とにおいて、同経典の翻訳者及び訳出年代についてそれぞれ違う見解が示されているという奇妙な現象である。両者がいずれも智昇その人の記述であるとして、その両方が相反しないような解釈を展開させていく中、研究者は『首楞嚴経』の漢訳の本数をめぐって意見を対立させるようになった。しかし、この不可思議な現象は、智昇が意図したものではなく、おそらく『続図紀』のテキストの変遷過程に起こったものではなかろうか。この可能性を示しているのは、現行諸刊本とは内容をやや異にしている『続図紀』の日本古写経本である。

『続図紀』の日本古写経本は、金剛寺本と興聖寺本などが現存している。その一つ、興聖寺本の中で、『首楞嚴経』の翻訳に関連する箇所には以下のようにある。

364 沙門釋懷迪修洲人也。住本洲羅浮山南樓 /365 寺，其山乃仙聖遊居之處。迪久習經論多所 /366 該博九流七略粗亦討尋，但以居近海隅，數 /367 有梵僧遊止。由就學書語復皆通悉。往者三 /368 藏菩提流志，譯寶積經，遠召迪來以無證義。 /369 所為事畢還歸故鄉，後因遊廣府，遇一梵僧， /370（未得其名）齋梵經一甲，迪遂對譯名大佛頂如來 /371 密因脩證了義諸菩薩萬行首楞嚴經一部 /372 十卷。迪筆受經旨兼緝綴文理其梵僧傳經事 /373 畢莫知所之。有因南使，流經至此。〔興聖寺一切経本（貞1181）参照〕

この内容が前掲の刊本『続図紀』の内容と大幅に相違していることは明らかであるが、それにしてもどこか見覚えのある内容ではなかろうか。それもそのはず、この文章は、前掲の『開元録』の該当箇所とは細部の相違を除けばほぼ一致しているのである。つまり、『首楞嚴経』の関連記述に着目すると、現存する『続図紀』のテキストとしては、概ね、大正蔵等の刊本系と興聖寺本等の日本古写経系と二種類があるのである。そのうち、日本古写経本『続図紀』は、『首楞嚴経』の関連記述において従来の刊本系本とはかなり相異しているものの、『開元録』とはほぼ一致している。もし日本古写経本『続図紀』が同経録のオリジナルな形態を留めたものであれば、長い間研究者を悩ませてきた『続図紀』と『開元録』との

(10) 日本古写経本『続古今訳経図紀』の発見とその意義 (林)

間に存在する記述上のブレは、『続図紀』のテキストの改竄か改変によってもたらされたものと認められる。しかし一体誰がその部分の内容に手を加えたのであろうか。

まずは智昇本人がその改変に関わったという可能性はほとんどないことを指摘しておこう。というのは、現存の房山石経本『首楞嚴経』の冒頭には、「大唐沙門懷迪共梵僧於廣州制止道場譯出」とあり、これは古写経本『続図紀』と『開元録』の記述と一致するものであるからである。この房山石経の底本となったのは、唐の金仙公主が開元十八年(730年)に房山へ寄贈した4000巻余の漢訳仏典であると言われている。更に、それらの寄贈仏典を房山まで搬送する際の責任者はほかでもなく智昇その人であった。従って、智昇が『続図紀』と『開元録』を編纂した730年頃には、「大唐沙門懷迪共梵僧於廣州制止道場譯出」とされている『首楞嚴経』が流通しており、そして、智昇がその種類のテキストに触れる機会があったことになる。だから、彼は『首楞嚴経』の翻訳について、古写経本『続図紀』と『開元録』に見えるような記述を残したとするのが自然であろう。逆に言うと、その記述をそのまま伝えている古写経本『続図紀』と『開元録』の記述こそが、730年成立当初の原形を留めていると言えよう。更に、たとえ両録の成立後に何らかの事情によって改変をしなければならない必要性があったとしても、智昇は一方の『続図紀』に改変を加えながらも、もう一方の『開元録』の該当箇所はそのまま放置しておいたとは考え難いだろう。

円照が800年に撰述した『貞元録』巻14には、「大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經十卷(一名中印度那爛陀大道場灌頂部録出別行)右一部十卷其本見在」(T50, 805b13-14)に続き、以下のように記されている。

沙門般刺蜜帝，唐云極重，中印度人也。懷道觀方，隨緣濟度，展轉遊化，達我支那(印度國俗呼廣府為支那，名帝京為摩訶支那)。乃於廣州制旨道場居止。衆知博達，祈請亦多，利物為心，敷斯祕蹟。以神龍元年，龍集乙巳五月乙卯二十三日辛丑。遂於灌頂部中，誦出一品，譯成十卷，即前萬行首楞嚴經是也。烏菴國沙門彌伽釋迦(釋迦稍訛正云鑠佉此曰雲峯)譯語。菩薩戒弟子前正儀大夫同中書門下平章事清河房融筆受。脩州羅浮山南樓寺沙門懷迪證譯。其僧傳經事畢，汎舶西歸。有因南使，流通於此。(T55, 874a13-27)。

これが刊本『続図紀』の問題箇所とはほぼ一致することは明白である。『続図紀』(730年)と『貞元録』(800年)の成立時期を考えれば、円照が『貞元録』をまとめるに際して『続図紀』の内容をそのまま踏襲したかのようにも思われる。しかし、刊本『続図紀』の内容に改竄の痕跡が認められる以上、両者の参照関係は議

論の余地があるものとなる。特に、円照は『続図紀』と深い関わりのある人物である。『宋高僧伝』巻15の「円照伝」には「改元建中…僉定…續古今翻譯圖紀」(T50, 805b13-14)とあることから、円照は建中元年(780年)に『続図紀』を検定したことがあるということがわかる。更に、円照本人もまた『悟空入竺記』(790年)の後書に以下のように記している。

沙門圓照，自惟疵賤，素無藝能，喜遇明時，再登翻譯。續修圖紀，讚述真乘。并修大唐貞元續開元釋教錄。悟空大德，具述行由，託余記之，以附圖錄，聊以驗其事也。(T51, 981b18-21)

つまり、円照は780年に智昇の『続図紀』を「検定」・「続修」したという経歴の持ち主なのである。これらの事柄を総合的に考慮すると、円照の『貞元録』に刊本『続図紀』と同様の内容が現れたことから、彼こそがその新しい記述を『続図紀』にあった元々の内容(古写経本『続図紀』や『開元録』に見えるようなもの)と差し替えた張本人であるという可能性が高い。

4. 結論

以上、日本古写経本『続図紀』に着目し、特に『首楞嚴経』に関わる記述内容をめぐる謎の真相に迫った結果、以下のことが明らかになった。第一に、現存する『続図紀』のテキストとして、大正蔵等の刊本系本と興聖寺本等の日本古写経系本と二種類があるが、そのうち日本古写経本『続図紀』は、『首楞嚴経』の関連記述において従来の刊本系本とはかなり相異しているが、『開元録』とはほぼ一致する。第二に、『続図紀』と『開元録』との間に存在する『首楞嚴経』の関連記述上のブレは、『続図紀』のテキストの改竄か改変によってもたらされたものと認められる。第三に、『首楞嚴経』の関連記述において、円照の『貞元録』に刊本『続図紀』と同様の内容が現れたことから、円照こそがその新しい記述を『続図紀』にあった元々の内容と差し替えた可能性が高い。その時期は780年頃であろう。日本古写経本『続図紀』の発見は、千三百余年にわたって仏教者たちを悩ませてきた本経の伝播史上の深い謎の真相を解く鍵となるであろう。

※紙面の関係上、注記省略。

〈キーワード〉 日本古写本、智昇、『続古今訳経図紀』、『首楞嚴経』

(中国海南師範大学南海区域文化研究中心研究員、文学博士)